

## 岩手医科大学歯学会第12回例会抄録

日時：昭和56年6月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

## 演題1 クロルプロマジン連投によるピロカルピン誘導唾液分泌反応の Supersensitivity と Sub-sensitivity について

○齊藤 弘子, 村井 繁夫, 米倉 秀夫  
 島山 勉夫, 増田 義勝, 小山 英子  
 伊藤 忠信

## 岩手医科大学歯学部薬理学講座

アトロピン (ATR) を連投すると, 伝達物質に対する唾液腺の増感現象 (Super) が発現することが知られている。抗精神病薬のクロルプロマジン (CPZ) はATR同様抗唾作用を有するので, 今回演者らは, マウスの唾液腺の感受性に及ぼすCPZ連投の効果を検討した。方法) マウスの唾液分泌量の測定はRichterの方法を改良して行った。すなわち, 雄マウスをウレタン (0.5g/kg, i. p.) で鎮静後, テープで固定板に腹位に固定し, ろ紙上に置いた。測定は唾液分泌促進剤のピロカルピン (PIL, 0.8-1.25mg/kg, S. C.) 投与後, 10分毎に新しいろ紙面上に移動し, 90分間に得られた唾液のスポット面積を画像解析装置により計測して行い, それを全唾液分泌量とした。CPZとATRの連投は1日1回, 1~3週間にわたり実施した。CPZとATRの前処理は1時間前に行った。結果) CPZ (4-40mg/kg, S. C.) とATR (0.008-5mg/kg, S. C.) を3週間連投した場合, いずれも低用量では抑制効果は徐々に減弱した。また, 両者を1週間連投した場合, CPZでは休業48時間後に, ATRでは休業24時間後にPIL (0.8mg/kg) の催唾作用に対する唾液腺の Super が発現した。この Super は低用量のCPZ (4mg/kg) やATR (0.008mg/kg) の連投によっても出現し, Superの持続時間は用量依存的であった。また, CPZ, ATRともに Superの発現後, 減感現象 (Sub) が発現し, その後PILに対する唾液腺の感受性は正常に復した。考察) 以上の結果より, CPZの連投は

PILに対する唾液腺の Super を発現させることは明らかである。本実験において, (1) Super が極めて低用量 (0.008mg/kg) のATRにより発現すること, (2) 高用量 (5mg/kg) のATRによる Super がわずか24時間の休業により観察されること, (3) Superの後に Subが発現することなどの結果は, 唾液腺の Superr に関する従来の報告と相違しており, 興味深いものと考えられる。

質問: 村井 竹雄 (歯放)

唾液の容積測定法についてお教え下さい。

回答: 齊藤 弘子 (歯薬理)

ろ紙上に分泌された唾液のしみのスポット面積と唾液量とは直線関係にあるため, スポット面積を画像解析装置で計測し, 唾液量とした。

質問: 市丸 俊夫 (歯理工)

クロルプロマジンとアトロピン急性反応については相違はあるか。

回答: 齊藤 弘子 (歯薬理)

唾液腺に対する作用は同じである。

追加: 伊藤 忠信 (歯薬理)

向精神薬クロルプロマジン服用者は口渇を訴えることが多いが, 末梢性によるものか中枢性によるものか明確でない。また, クロルプロマジン連投後の休業による口渇や唾液分泌などの検討はなされていないのが現状である。

今回の研究ではクロルプロマジン1週間連投後の休業でピロカルピンによる唾液分泌量の増大と減少の2つの現象があることを見いだした。

## 演題2 大脳皮質前冠状回における口腔内 representation

○平 孝清, 松本 範雄, 佐藤 匡  
 鈴木 隆

## 岩手医科大学歯学部口腔生理学講座